

出来事につかまれる

松田正隆

ドラマ演劇をもう一度考え直してみようとしたときに、「劇とは何か」という問いを、やはり避けては通れないだろうと思います。ドラマ演劇であれ、ポスト・ドラマ演劇であれ、演劇の上演を目論むのであれば、ドラマをめぐる問題から思考されねばなりません。論じる上でヒントにしたいと思っていたのは、エマニュエル・レヴィナスが『全体性と無限』の序文で、ドラマを筋展開や登場人物の心理、行動ではなく、出来事から受ける力のことだとするニーチェのドラマの定義（『ワーグナーの場合』）を引用し、顔のかなたに位置づけられる諸関係や存在のむすびあいのことを、曖昧ではあるが、それに敢えて適した言葉を当てはめるなら「ドラマ」ではないか、と述べていたことでした。

マレビトの会は、作品創作において主題として来た、ヒロシマ・ナガサキの、あの、はてしのない出来事が、物語に従属する再現劇（ドラマ）としては表現できないとしてきました。しかし、劇（ドラマ）には、まだ従来の意味とは違うニュアンスを持ちうる可能性があるのではないか。そのあたりのことを、ここで、私なりに（個人的なことなので、恐縮なのですが）、考えてみたいと思います。

もう二十年以上、ずいぶん昔ですが、私は、ある事件のことで警察から呼び出されたことがあります。その事件（かつて、私はこの事件を題材にして『雲母坂』という戯曲を書いたことがあります）というのは、私の故郷の九州の西の果ての集落で殺人未遂事件があり、殺されかけたのは、実家の近所に住む中年女性でした。彼女は、母親と一緒に暮らしており、その事件の際に家は火事になり、消防車などが駆けつけたときには、火の手からかろうじて逃れた黒い女が、脇腹を刺され、うずくまっていたそうなのです。私の父親や集落の人たちからは、その女性が近所の男たちだけでなく、周辺の比較的人のたくさんいる町の男たちの夜の相手もしていたという話まであり、事件の夜、火事の見物人のなかにブリーフ丁の男が仁王立ちしていて、あれは、どこそこの誰々だったとか、知らない顔だったとかという話がまことしやかに噂されたのでした。

犯人は未だ不明のまま、ひとまず警察は、その集落の人たちだけでなく、そこを離れた都会に住む家族、親類縁者までも事情聴取をするということになったのでしょ。その頃、京都にいた私の事件当夜のアリバイを聴きたいということでした。それで、私は桂警察署へ行き、あれは刑事だったのでしょうか、もう忘れましたが、その警察の人に、その日の私の行動のことを話しました。たぶん、アルバイトに行ったと話したと思います。事件の日からひと月以上たっていたので、正確な自分の行動を語れていないような気もしました。警察の人も、あなたが犯人というわけではなく、一応、聴いておくだけですからと、笑顔な感じでの接しようだったので、そんなに不安ではありませんでしたが、今、思い返してみても、とても奇妙な体験でした。

私が事件を起したわけではありませんので、私は犯人ではないのですが、だから、全く身に覚えがないのですが、それでも、全くもって身に覚えがないというわけでもないのです。これは、どういう感覚なのでしょう。

それは、あの故郷を私のほうが選んだわけではなく、私は生まれると同時に故郷と関わらざるをえなかったという感覚に近い気もします。この事件の場合、何かが、事件のほうから私めがけやって来たのです。それゆえ、私でなくともいいじゃないか、と文句を言えない感じがしましたし、明らかに罪を犯したのは私ではないけれど、おまえ（私のことですが）が、あの土地の生まれなのは確かなのだろう、と突きつけられているようだったのです。前近代の土着的な共同体の記憶との出会いのことを述べているのではありません。私自身の出自の宿命のようなものを語りたいたいのでもないのです。殺人未遂という法的なこととは、別のところで、罪に問われたようなものでした。

これは、次のような経験にも通じるような気もします。朽ち果てた家とか、何でもない雑木林とか、田舎の畦道の盛り上がった土手とか、そんな殺風景な眺めを見ているときの息苦しき。いま・ここで、この何でもない、どうでもよい光景を前にしているのは私一人しかいないと思った途端、眼前の現在の世界がものすごく重く感じられるのです。説明しようにも、あまりに具体的すぎて途方もないような現前がそこにあり、その無意味な有り様はなんにも置き換えようもなく、ただ、そこにあるものをここで見ている自分の存在が、なんとも奇妙なのです。それが私でなくともいいはずなのに、これを見ている私は私以外の何者でもなく、私の視覚からは逃れられない。それが、「いま・ここ」の現在ということなのでしょう。私は、いろいろな過去の記憶を持つ一個の人間

であるが、そんなことは全くどうでもよろしいという圧倒的な現在時に溶け込まれてしまいそうなのです。

たとえば、人身事故等で、電車が普段停まらない場所で停まり、まだ、その原因がつかめないままに車内の時間が推移し空気が重くなるときにも、それは感じます。あるいは、順調に思えたお芝居が、何らかのトラブルで、突然止まってしまったときとかに、俳優であれ観客であれ、身体とそのまわりの状況との密着が起きます。

だけど、私の身体が現在から逃れられない、というのは当たり前のことで、外界との密着が「起きた」というのではなく、そもそもがすべての人間は現在時の中を移ろいながら生きているのでした。個人の中（あるいは、その人の所属する共同体の中）に記憶があるゆえ、現在の進行中の時の流れから、いくばくかの距離がとれているのでしょう。眼前のいま・ここの流れとは別に、その人にはその人なりの固有の時間が「あった」というわけなのです。その人のその人らしさ（個性や人格）を重んじるということは、その人に過去があり、その記憶を保持しているがゆえのことです。つまり、記憶を持つからには、人間というのは、線的な時間のイメージの中で軸足を少し過去に置きながら未来のほうへと、世の中を営んでいるつもりなのですが、不意に、いま・ここの出来事に身体をひつつかまれると、本来の現在時のほうへ軸が戻る、ということになるのかもしれませんが。出来事に遭遇するということは、現在との見分けのつかなさにも陥ることであり、その人の過去の記憶を消し去り、時間そのものの中で窒息することなのです。

それにしても、あの故郷の事件の知らせが警察から届いたときの身に覚えのなさ、勝手な思い込みかもしれませんが、故郷に再認され、再び受肉した驚きのようなものの交錯を、どのように言いあらわせばよいのでしょうか。

警察や集落の人たちから知らされた情報から、事件のあらましを想像して、私の頭の中に浮かぶ映像のようなものがあります。煤に汚れた女の姿。その女の脇腹のあたりの着衣に滲む赤い血。背後には彼女の母である年老いた女の無表情な顔。さらに背後には炎と煙を吐く農家。当たり前のように、見物人の中にいる白いパンツだけを履いた裸の男。

しかし、そのイメージが、あの出来事につかまれた、そのときの感触の核心を突いているのかというとそうでもないのです。そのイメージは、かえって、あの出来事の夜の闇を、はかり知れないような深淵を、鮮明な像のヴェールで

隠してしまっているのかもしれないのです。いや「夜の闇」や「深淵」も一つのなりそこないのイメージだとすれば、あの出来事の到来そのもの、私との、「むすびつき」のことを、ただ単に、劇と言わざるをえないのかもしれない。

劇（ドラマ）を筋や行動、葛藤としてとらえるのではなく、出来事の「受け入れ」として考えること。出来事それ自身ではなく、ましてや出来事の表象でもなく、出来事のほうからの、それを私たちとむすびつけようとする力のことを「劇」と呼びたいのです。それゆえ、ドラマ演劇では、出来事を生起させるのではなく、出来事につながる劇を生起させねばなりません。

この前提があって、ドラマとしての戯曲やそれを演じる時間／場所としての演劇や劇場のことを、みなさんと議論してみたいと思ったのでした。